

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 8 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520505

研究課題名(和文)現代方言に基づくアクセント類別語彙の研究

研究課題名(英文) study of "akusento ruibetsu-goi" (words of the Kindaichi tonal classes) from the perspective of the present-day dialects

研究代表者

中井 幸比古 (Nakai, Yukihiro)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10221441

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語アクセント史研究及び日本語方言アクセント研究において非常に重要な位置を占めるアクセント類別語彙を、現代の京阪式(中央式)諸方言のアクセントの観点から検討したものである。アクセント類別語彙に含まれる各語の方言間の対応、馴染み度や使用頻度などについて考察を加えた。また、現代の共通語では使われない語も扱うために、京阪式アクセント諸方言の方言辞典のアクセント記述についても検討を行った。さらにアクセント研究者以外が作成した各種アクセント資料がどのようなアクセント観(段階観・方向観)に基づくものであるかについても研究を行い、各資料の有用性について考察を行った。

研究成果の概要(英文)：This is a study of "akusento ruibetsu-goi" (words of the Kindaichi tonal classes) from the perspective of the present-day Keihan-type (Central-type) accents. "Akusento ruibetsu-goi" is essential to the historical and dialectal study of the Japanese accent. Correspondence of accent forms among dialects, degree of familiarity and frequency in various corpora of each word of the Kindaichi tonal classes were investigated. In order to include patois into the words of the Kindaichi tonal classes, description of accent in dialect dictionaries of the dialects whose accent is Keihan-type was examined. Views of accent ("level" or "non-level") of the authors of various accent data were also studied.

研究分野：日本語学

キーワード：類別語彙 アクセント 中央式 方言辞典 馴染み度 頻度

### 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、本研究の研究代表者は類別語彙に関する現代諸方言のアクセント資料収集について、中央式諸方言を中心に一定程度行っていたが未整理の点が多く、先行諸研究の参看や研究も不十分であった。本研究によって、研究を進展させたいと願っていた。

### 2. 研究の目的

アクセント類別語彙は、院政期以降の文献資料から推定される、京都を中心とする近畿中央部のアクセントと、現代諸方言アクセントの両面を根拠に設定されたものである。前者の、院政期以降の文献資料から推定される近畿中央部のアクセントについては研究が進んでいるが、後者の現代諸方言アクセントについては、多くの研究者の調査報告があるものの、未だ不十分な点もいろいろと残っている。

そこで、現代方言について、文献アクセント史と関係が深い京阪式(中央式)アクセントを有する諸方言を中心に、私自身の調査結果と、従来の報告を包括的に統合したデータベースを作成し、その資料に基づき、類別語彙の再検討を行う。

### 3. 研究の方法

#### (1) 調査資料

中央式アクセントを有する諸方言のアクセント調査資料は、以下の(a)~(e)などに分類できる。

(a)アクセント辞典形式で多量の語彙(少なくとも1万以上)のアクセントが記載されている資料。

例:平山輝男編1960『全国アクセント辞典』(東京堂出版) 榎垣実担当『日本国語大辞典(初版)』(小学館)の京都アクセント。吉原保1983『東京語・大阪語アクセント辞典』(タイムス)の大阪・徳島アクセント。杉藤美代子1996『大阪・東京アクセント音声辞典』(丸善)の大阪アクセント。2002『京阪系アクセント辞典』(勉誠出版)の各地のアクセント。

(b)少数の語彙(ほとんど数百項目以内)を対象としたアクセント調査報告。

その多くは類別語彙を中心的な対象としたものである。アクセントの地理的な分布や世代差に言及するものが多い。極めて多くの研究があるが、早い時期の研究の一例として、金田一春彦1955『近畿中央部のアクセント覚え書』『東条操先生古稀祝賀論文集』(近畿方言学会)が著名である。本研究代表者の未整理の資料もある。

(c)上記の(a)と(b)の中間的な資料で、特定地点のアクセント記述を目的とするもの。

語数はさまざまだが、数百から数千のものが多い。類別語彙はほぼ必ず含まれる。語数が多くなれば上記(a)に接近する。

(d)アクセント記号付き方言辞典。

方言辞典には、従来類別語彙として認められている語はそれほど多くは含まれない反面、現代共通語では使用されないものの類別語彙として今後採用される可能性がある語が掲載されている可能性がかなりある。とりわけ、こういった語彙は最近の共通語の影響は受けていない可能性が相対的に高いわけで、共通語化を考える必要が比較的少ないという利点がある。反面、最近に使われない語が多くなっており、アクセントの伝承も悪くなっていて、先行のアクセント記号なしの方言辞典に載っている語を機械的に採用し、意味から類推してアクセント記号を付けている場合もあるので、注意が必要である。

精確なアクセント資料としては、平山輝男編『現代日本語方言大辞典』の各地のアクセント、牧村史陽1955『大阪方言事典』、富田大同・和田實1969~1972『兵庫県小野市方言稿』『明石高専研究紀要』7・8・10・11・12、土居重俊他1985『高知県方言辞典』、高田豊輝1985『徳島の方言』、同2012『徳島の方言補遺及び徳島市南部と周辺の地名』、などが著名である。

(e)アクセント記号付き会話・談話資料。

類別語彙は必ずしも多く含まれるとは限らず、検索が容易でないものも多く、「文アクセント」を記載した文字化資料は単語アクセント研究には利用が困難なものもある。

本研究では、以上のうち、(e)をのぞき、(a)~(d)を資料として扱うこととした。

#### (2) 一般人のアクセント観・方言辞典のアクセント記号の精度

上記資料のうち、(a)(b)(c)については資料として問題なく使用することができるものがほとんどであるが、(d)については方言アクセント研究者が作成したものはごく少数であり、さまざまな背景をもった著者・編者がアクセント記号を付したものがほとんどであるため、アクセント資料としての精度もまたまちまちである。従って、アクセント資料として利用のためにはしばしばアクセント記号の意味や著者・編者のアクセント観を探らなければならない。こういったことも類別語彙アクセントの研究の、前段階の作業として必要なので、研究を進めた。また、方言辞典とは離れて「一般人」が持つアクセント観についてネット上の記述を中心に考察を行い、その中で方言辞典のアクセント記述を位置付けた。

#### (3) 各語の現代諸方言における馴染み度・使用頻度

現代諸方言のアクセントを史的研究の資料として利用するためには、当該方言のアクセントが古くから、耳から聞いて伝わったものであることを確認しておく必要がある。これを明らかにするためには、方言ごとに、古い世代の話者の馴染み度・使用頻度調査を行うべきであるが、過去のアクセント資料と同

世代の話者を対象に調査を行うことはもはや不可能な場合が多く、かといってより下の世代の調査では共通語化のために、伝統方言アクセントのための参考資料としては使用することが難しい。そこで、今回はとりあえずは共通語における馴染み度・使用頻度のみを検討することにした。

#### (4)資料間の各語のアクセントの異同

アクセント類別語彙として認定されている各語について、資料間のアクセントの異同をさぐる。そして、異同があるものについては異同の実態を明らかにする。

若い世代の共通語化が絡んだ変化は社会言語学的な研究としてはたいへん興味深いテーマであるし、下の世代の話者や研究者が自分自身のアクセントを基準に発言することの危険性を知らせるためにも解明が必要ではあるが、史的研究のためにはあまり役立たないので、なるべく当該方言の古いアクセントを探ることをめざした。

当初は必要に応じて臨地調査も行う予定であったが、現時点で得られる資料は何らかの共通語の影響を受けているものが多く、史的研究のためには不向きな部分をいくらかでも含む場合が多いので、過去の調査資料を中心に研究を進めることとした。

#### 4. 研究成果

研究成果については、上記「研究方法」の(2)～(4)の番号を付けた事柄について述べていく。「研究方法」とは番号が一致しないので注意されたい。

##### (1)中央式諸方言の方言辞典のアクセント記号の精度

アクセント記号付きの方言辞典の、アクセント記号の精度はさまざまであるが、各種のアクセント記号付き方言辞典を検討した結果、以下のような分類や精度さ野判定が行えることが明らかになった。

(a)英語の強さアクセントの記号をそのまま持ち込んだもの。

これは資料として使うことは困難な場合が多い。共通語アクセントならばアクセント核の位置に強さアクセントの記号を付けておくことができれば、とりあえずはアクセント記号としてはそれでよい。(但しインターネット上のアクセントに関する言説を閲覧していると、語頭から数えて第1拍と第2拍の間の上昇に着目して第2拍に「強」の記号を付けてしまうミスがしばしばあるようである)。しかし、中央式の場合には2式の区別があって、この方法ではすべての音調型を区別することができない。ただ、小林清次1974『大阪府能勢方言辞典』のように、一部の型にのみ記号付けを限定すれば、それなりの効果は発揮できる。この辞典においては、H1[高起平進式で第1拍に核]型は語頭拍に記号、L2[低起上昇式で第2拍に核]型は2拍目

に記号、L0[低起上昇式で無核]型は語末拍に記号という形で記号を付けている。そしてこの3つの型以外は記号は付けていない。そのため、アクセント記号が付いているものに限ればアクセント型をほぼ特定できる(但し2拍L0とL2の区別はできない)。もちろん、アクセント記号が付いていない語のアクセントは不明である。

(b)高低2段階の段階観によるもの。

ほとんどのアクセント記号付き方言辞典はこの形式を取る。この形式を取るものには精確なものが多く、一般人が中央式諸方言のアクセント記号付けを行うときにはこの方式がもっとも安全であろうと思われる。但し、低起式の式音調の上昇位置が方言によって異なり、上昇位置がはっきりしない方言(京都府旧船井郡園部町方言)のような場合や、2拍L0型とL2型の助詞なしの単独での音調の差異を拍内下降の有無ではなく音調幅の大きさなどで捕らえようとした場合には、たとえば中西信弥1999『西陣織屋ことば辞典』に見られるように、高中低の3段階を取ることもある。

単語単独のアクセント型の表記仕分けはできていても、語末核型と無核型の区別はしていないものがいくらかある。もちろん区別することがより望ましいが、もし単語単独の音調が同じであると、同じになることが多いとしたら、区別をしないのも一つの立場としてはありうると考えられる。

なお、著者にアクセント型の一覧表の意識・知識があるほうがより精確な記述ができる場合が多いようである。しかし、型の一覧表に関する意識・知識は精確な記述のために必須というわけでもないようである。

(c)段階観と方向観の両方を含むもの。

式と核の有無と位置(語頭からの拍単位で数える数字方式など)によるものはアクセント研究者が関係するもの以外はまったく存在しない。先駆的な研究として田中萬兵衛1934『淡路方言研究』があるが、これは高低2段階の段階観と、池田要によって考案された方向観の記号(1931年に論文作成、1942年に『日本語のアクセント』で結果をはじめて公表)とが混然となったような方式であって、未整理な点が多いのであるが、中央式ではじめてのアクセント記号付き方言辞典であり、方言アクセント研究史上重要な位置を占めるものである。

##### (2)各語の現代諸方言における馴染み度・使用頻度

中央式諸方言における、類別語彙各語の馴染み度・使用頻度については新たな調査はできなかったのは遺憾である。ただ、従来の数多くのアクセント資料における「使用が稀」の注記や、平山輝男他編『現代日本語方言大辞典』の掲載状況などからおよそのところは推測できる場合もある。

一方、共通語・現代首都圏方言における馴

染み度(天野成昭他編著 1999『日本語の語彙特性 第1期』[三省堂]による)や使用頻度(Tono, Yukiho et al. 2013 *A Frequency Dictionary of Japanese: Core Vocabulary for Learners* [Routledge]による)を参照して、坂本清恵他編 1998『「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』(アクセント史資料研究会)所収の語彙について検討を加えた結果、以下のようなことが明らかになった。

体言については、2拍語は各類とも、使用頻度が高い語・馴染み度が高い語が、一定数存在するが、1拍語・3拍語は類によっては使用頻度が高い語・馴染み度が高い語は語数が少ない。1拍語はそもそも各類の所属語数が少ないということもある。

一方、動詞・形容詞については、各類とも使用頻度が高い語・馴染み度が高い語が一定数所属する。短時間のアクセント調査のためには語数が多すぎるほどである。

諸方言間のアクセント対応が3拍体言について不明瞭な場合が目立つことは、使用頻度・馴染み度がやや低い語が多いことと無関係ではないと思われる。

また、今後の方言アクセント調査では、共通語・現代首都圏方言の強い影響を受けた話者を対象とせざるをえないが、その話者にとっての使用頻度・馴染み度は、共通語・現代首都圏方言のそれと一致する可能性が高い。その際、使用頻度・馴染み度が低い語は当該方言アクセントの伝承が非常に悪くなっているはずである。したがって、本研究のような共通語・現代首都圏方言における使用頻度・馴染み度の考察は、方言アクセント研究に直接結びつくものとなる。

但し、本研究で使用した馴染み度や使用頻度の資料は万全とは言えない。たとえば、使用頻度については、Tono 他上掲書においては、硬い書き言葉での使用頻度や改まった講演などにおける使用頻度もある程度考慮に入れられているのだが、アクセント研究のためには、むしろだけた話し言葉の頻度に限ったほうがより適切であろうし、言語習得関係の資料によって、幼少時に習得される語であるかどうかなどを確認することも必要となる。

なお、早稲田語類・金田一語類は、各語の意味の指定をしていないため、使用頻度・馴染み度といっても意味によってかなり異なる場合もあるので注意が必要である。

また、使用頻度・馴染み度の判定基準となった共通語・首都圏方言の話者・筆者はそれほど上の世代ではない可能性が高いため、伝統的な日本の生活をしてきた人々とは判定がかなり異なる場合も多いと思われる。また現代においても、都市部は農山漁村部とは生活環境がある程度は異なるため、当然語彙の馴染み度や使用状況も異なってくるであろう。

### (3)資料間の各語のアクセントの異同

資料間の各語のアクセントの異同については、各資料の整理に手間取ったため、極めて遺憾ながら、研究期間内に完成させることができなかった。今後できるだけ早く整理を完成させて、研究結果を公表したいと考えている。

方言辞典の整理についても資料整理に手間取り、類別語彙に付け加えるべき単語の抜き出し作業もほとんど進まなかった。今後できるだけ作業を進展させたい。

さらに、筆者自身の資料についても整理を若干は進められたが、未だ公表できる段階になっていないのは極めて遺憾である。これまた、できるだけ早い時期に整理を完成させたいと念じている。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

中井 幸比古、日本語アクセントに関する3つの問題 音調意識、アクセント規則の有効性、類別語彙、神戸外大論叢 65 巻-1、2015、3 -30

〔学会発表〕(計0 件)

〔図書〕(計0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし。

### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

中井 幸比古 (NAKAI Yukihiro)

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：10221441

#### (2)研究分担者

なし

#### (3)連携研究者

なし